

いと思っています。

教会の中では「祈り」があれば解決するよう
に思われる方が多く、「神様の御心」で片づけ
られてしまうケースも少なくありません。「イ
エス様はどうなさったか」を常に心の中心に置
き「今、どう行動すべきか?」と祈りつつ活動
をして行きたいと思っています。

注

1 韓国スミダの闘い：1989年、日本のスミダ電機が馬山
にあった韓国スミダの工場の450人の労働者を、ファッ
クス一枚の通知で一斉解雇した。これに対して4人の
労組幹部が、8ヶ月にわたって日本のスミダ電気本社
前で闘争を行った。東京教区正義と平和委員会を中心
とするキリスト者は「韓国スミダ労組と連帯する会」を
結成し、座り込み、ハンスト、政府などへの要請行動
などを行って、この闘争に協力した。

平和を望むなら生命をすくえ～在日韓国人「政治犯」と正義と平和協議会

■ 古屋敷一葉（日本カトリック正義と平和協議会専門委員、援助修道会）

正義と平和協議会が設立当初の1970年代から
関わった活動の一つに、在日韓国人「政治犯」¹
救援活動があります。反共主義を掲げる韓国の
軍事独裁政権下において、韓国を訪問、あるいは韓国に留学していた在日韓国人たちが拘束さ
れることが相次ぎました。日本で自由にさまざまな思想に触れ、さまざまな人に会うことのできた
彼らは政権転覆を目論む「北のスパイ」として検挙され、有罪判決（死刑判決もあった）を受け
て長期間刑務所で過ごすことになりました。生活環境は劣悪。逆らえば拷問にも遭いました。

彼らは無実であると家族や友人らは救援会を
作りました。そこに参加した若いカトリック
信徒たちが正義と平和協議会にも支援を願っ
たのです。1977～78年には、六人の在日韓国人
「政治犯」救援のための署名活動が日本の信

徒に向けて繰り広げられました。すぐにその願
いが叶えられたわけではなく、1980年代にもエ
キュメニカルな署名活動や、日韓の司教たちが
韓国政府に彼らの解放を要請するなどの活動が
行われました。彼らは韓国が民主化した80年代
後半から釈放されていきましたが、それは刑期
満了や特赦によるもので、無罪を意味するもの
ではなかったのです。再審請求をして、無罪判
決を勝ち取る名誉回復のための闘いが現在も続
いています。

さて、今年の5月に大阪のある韓国料理店で
国連拷問被害者支援の日（6月26日）を記念す
る行事が行われました。人権医学研究所とキ
ム・グンテ記念治療センター「スム（息）」²、
および国家暴力生存者会と在日韓国良心囚同友



「2024年感謝の盾」を囲んでの記念写真
写真中央 ハンチング帽の男性がハム・セウン神父、後列右から5番めがイ・チョルさん

会の主催の集いです。国家暴力生存者会に所属するのは、韓国において国家保安法により国家暴力を体験した生存者および遺家族の方々と、在日韓国人「政治犯」と呼ばれた方々と同じ苦しみを味わっています。この集まりに参加する友人の招きで、私も参席することになりました。集まりでは、主催団体の代表者挨拶と、拷問生存者の映像自叙伝上映、「2024年感謝の盾」の贈呈が行われました。

挨拶をされた人権医学研究所の理事長はハム・セウン神父、そして在日良心囚同友会の会長はイ・チョルさん。正義と平和協議会には縁の深い方々です。ハム・セウン神父と言えば、正義具現全国司祭団。この司祭団は1974年に韓国ウォンジュ教区のチ・ハクスン司教拘束事件を受けて、社会の構造的矛盾を正し神の正義を実践する目的で結成され、韓国民主化闘争において正義と平和協議会と情報交換をしていました。イ・チョルさんは、正義と平和協議会が救援のための署名活動を行なった六人のうちの一人。獄中での体験を綴った『長東日誌』を出版され³、教会関係でも何度か話をされています。私にとっては、ある意味ビッグスターと言ったら大げさな表現かもしれませんが、民主化闘争を実際に闘った人々が目の前にいるということ自体、緊張するのです。

そして、彼らだけではなく、参加している多くの人が、実際に闘った人々と、また、多くの苦しみを受けた人々なのです。長い間冤罪により獄中にあった苦しみ、拷問の苦しみ、犯罪者の家族とされて受けた差別、偏見の苦しみ…映像で語られたこともあれば、実際に目の前で語られたこともありました。食事をしながら談笑している姿の裏にどれほどの痛みの歴史があるのかと思うと、言葉がありませんでした。

「感謝の盾」を受けたのは、在日韓国人「政治犯」たちを助けた日本の市民たち。これを届けるために日本で集まりがあったのです。数多くの市民の中から何人かが代表で来られていました。当時、韓国に知り合いも少なく、支援者

が少ないため、不利な立場にあった在日韓国人「政治犯」たちのために、多くの人々が支援活動を行ないました。それは個人に面会したり、手紙を送ったりするようなものもあれば、政府や世界の世論に訴えるものもありました。関わった人々は今も強い絆で結ばれています。皆が韓国語を理解するわけではないのですが、通訳のカン・ジョンホンさんが的確に訳されます。彼も正義と平和協議会が署名活動を行なった六人のうちの一人。激動の時代に、社会の人々とともに正義と平和協議会もあったのだなと私は当時を想像していました。その証人として私もここにいると思うことにしました。後から彼らの時代を追いかけているだけの自分を、仲間に入れてくださっていることに感謝しながら。

正義と平和協議会は署名活動についてまとめた冊子『平和を望むなら生命をすくえ』を発行しています。また、釈放された六人のうちの何人かの方々に講演会を依頼しており、その記録も残っているので、機会があればご覧になってください。教会が人々のうちにあって、福音を述べ伝えたことが記録に残っています。

注

- 1 当時の支援団体が「政治犯」と括弧をつけたのは、あくまでも無実の人であるというニュアンスからくるものだったようです。
- 2 人権医学研究所は、2011年に国家人権委員会から社団法人設立許可を受けた非政府、非営利民間団体として、人権価値をベースに暴力、差別から苦しむ人権被害者の治癒支援と健康権増進のために活動。
キム・グンテ記念治癒センター「息」は人権医学研究所の附属機関で、国家暴力被害者専門民間治癒センター。2016年、国際顧問被害者リハビリテーション協会（IRCT）の会員団体として承認され、世界76カ国160余りの拷問被害者支援団体と拷問防止及び被害者支援のために行動を共にし、韓国の拷問被害者の実態と支援内容を交流している。（人権医学研究所ウェブサイト参照）
- 3 『長東日誌：在日韓国人政治犯・李哲の獄中日記』（東方出版、2021年6月）。